有賀喜左衛門（述）・高橋明善（筆記）
「家族制度と日本社会（1954年東大講義録）」（1）

Kizaemon Aruga's Lecture Notes on "Family System and Japanese Society"
(1)

高橋 明善*
Akiyoshi TAKAHASHI

This paper is a document of the lecture on 'Family System and Japanese Society' delivered at the University of Tokyo by one of the most famous sociologists, Kizaemon Aruga in 1954. These lecture notes were written down by Akiyoshi Takahashi who was a university student and attended Aruga's lecture at that time. It was a time just before Aruga was beginning to actively publish many articles after a long silence following WW II. It was also a time just after a criticism by Seiichi Kitano had been offered which called into question on Aruga's understanding about the essence of the cognate relationship, which is a Japanese proper relationship among the stem family (honke in Japanese) and branch families (bunke in Japanese). We can observe the real voice of Aruga with a feeling of tension based on his polemical statements in this lecture, which we cannot understand from his written articles. These lecture notes not only contain a documentary value on this dispute but also introduce us a deeper understanding about Aruga's theory.

解題

1979年末、82歳で御逝去された有賀喜左衛門先生死後25年を記念して準備した追悼法要が、遅れて28年目の2007年10月28日実現した。ちょうど有賀先生の生誕110年記念の年であった。先生の薫陶を受けた弟子8人が、信州辰野町の菩提寺見宗寺（浄土宗）で法要を行った。墓参するとともに、土蔵一つだけ残る旧宅跡を訪問（現在JA利用）、母校の小学校の先生作詞の校歌碑を訪ねたり、中村吉治先生の墓、遺跡を訪ねたりした。前日の27日には同町、茅葺きの館に宿泊し、紅葉を愛で、お湯につかり、先生の思い出を語り合った。この会の開催にあたって、世話役をされた柄沢行雄氏（慶應義塾大学大学院での聴講生）が高橋が保存していた1954年の東大文学部での有賀先生の「家族制度と日本社会」と題する講義ノート（写真1）を活字化することを提案され、柄沢さんの努力で、学生の協力を得てそれが実現した。保存状態は比較的よいのだが、悪筆の上に50年の歳月を経て古びたノートのコピーを元に、学生はよくも読み取ってくれたものだと感じる。指導した柄沢さんと学生に感謝したいと思う。あわせて、ともに、有賀先生の学恩に

感謝して合掌したいと思う。

高橋が、活字化草稿に手を加えた。悪筆なので本人にしか読めない文字もたくさんあったからである。高橋のノートはなにぶん、若い学生時代のノートのため内容理解が不十分で、誤りもあるかと思う。

ノートは基本的に当時のままのものを忠実におこした。明らかな誤字当て字は修正した。しかし、文意が不明になるほどの箇所はない。講義筆記ノートの脇に、当時の学生である高橋のコメントが書き込んである場合がある。それらは、編集委員会が判断して、該当箇所にNo.を付して論文章末の注記に回している。

以下、解説に代えて、1954年という講義の時期が有賀先生の研究史上どのような位置づけを与えられるかを検討しておきたい。

①有賀先生は1943年主著『日本家族制度と小作制度』を完成すると共に、戦中から戦後にかけてその農村論の理論化を

写真1

* 東京農工大学名誉教授

はかりつつ活発に執筆活動が続ける。その理論化の中で「生活意識」、「庶民生活に於ける創造性」などの初期の有賀先生と共に有名な言葉は使われなくなる。代わって、民族的性格（特質論）、類型の相互転換論（同族と組の相互転換を含む）、聚落的家連合論などが提示され、それらをふまえ、封建制論争、日本社会の特質論争に活発に参加する。こうした理論的見解の表示、論争への参加、論文の積極的な執筆は1949年の末頃で中断される。

②再び有賀先生が発言を強めるのは1954年の末頃に講義が終わる時期に重なる。講義はだから、有賀先生が自己沈潜の時期を経て、再び活発に論文を発表し始める直前の時期に行われたものである。しかし、この時期以降になると再び、それまでの理論的概念や考え方である組的結合、聚落的家連合、民族的性格、同族と組の相互転換論はその理論から消えて行く。

③有賀先生は家を同族、村、労働組織との関連で説明していたが、1947年稿（1949年発表）ですでに「生活保障」上の機能（「家について」（著作集Ⅸ巻））という独立の家の内部機能にも着目をし始めていた。この講義でも「家が人間を守る最後のとりでとなっていた」としている。自衛のための家・家連合・村という考えは晩年の有賀先生が行き着いた基本主張である。家は全体社会の社会生活の単位とされると同時に家族の生活保障要求を担うという二重の規定から家を説明する姿勢が見られる。そのことが明確になるのは、講義の直後発表の「家制度と社会福祉」（1955年、著作集Ⅸ巻）である。この家の基本機能である家の福祉をはかるための家の存続要求を全体社会の政治との関係で理解しようとした論文である。

本家の経営発展のために分家創出が行われたとする戦時から、1950年頃までの有賀先生の見解は完全に転換している。講義の中でも、家連合の概念はあるが、聚落的家連合の概念は全く使用されず、家－複合家族・大家族－同族の検討に集中している。村落論を期待した当時の私にとっては若干の期待はずれだった。有賀先生の家論は、この後村論から遊離し、家の中の村、村の中の家ではなく、家を中心とする農村論となり、家連合は語られても、その外枠である村が語られなくなり、村の研究とは独立の家を軸に置く研究が有賀理論の中心となる。中村吉治氏の『村落構造の史的分析』（日本評論新社、1956年）が村のまとまりを否定したことが影響したように思う。

④沈潜期間の1951年喜多野清一先生が日本人科学会編『封建遺制』（有斐閣）の中で（学会大会報告を集めたもので、大会は1949年11月）有賀先生批判を行った。同族関係の本質を有賀先生は主従関係に求めるのに対し、喜多野先生は、本末の系譜の認知に置いて批判したのであった。これに対し、有賀先生は沈黙を守り続け、反論したのは、漸く1960年になってから「家族と家」（著作集Ⅸ巻）においてである。この年の日本社会学会シンポ「同族とその変化」を有賀・喜多野両先生が司会しておられる。そのシンポを特集した『社会学評論』第12巻第2号（1962年）で、有賀先生は、両先生の主張の対立点を整理している（「同族団とその変化」著作集Ⅸ巻所収）。しかし、講義の中では、学生の前だからこそこ、猛烈に反発して厳しく反批判している。1960年の反論には見られない厳しさである。温厚な有賀先生は論文の中では正面から対決するという姿勢はとらない。批判を受け止め、吟味し、自己の主張と比較し、反省すべきは反省し、自らの研究、発展の方向を考えるという姿勢での対応であるといっている。しかし、講義での喜多野批判にはそうしたソフトな姿勢は見られないのである。有賀先生の内面の一部を覗くことができるように思う。

なお、1965年、喜多野先生は「日本の家と家族」を執筆し、自説を主張された（『大阪大学文学部紀要』第11巻、後に『家と同族の基礎理論』未来社、1976年に再収）。これに対して、有賀先生は「家族理論の家への適用－喜多野清一氏の『日本の家と家族』を読んで－」（1965年執筆、『社会学評論』第19巻第2号（1968年）掲載、1965年刊の『日本の家族』至文堂と表裏の内容）で反論された。喜多野先生は、その著作（『家と同族の基礎理論』1976年）発表の際に有賀先生の論文を読んだ上で論点整理だとして、「附記」（1975年）を掲載している。その他重要な論点整理として、若干喜多野先生寄りだと思うが喜多野清一・住谷一彦「〈対談〉日本の家と家族－有賀・喜多野論争の問題点－」がある（初出1965年、『思想』527号（1968年）に再掲）。

文章上での論争が始まったのは、『封建遺制』発表後、9年後であった。しかし、本講義録は、喜多野先生の論文発表後、あまり時間のたたない時のものであり、文章では読み取れない有賀先生の緊張感のある生の声にふれることができる。講義録はこの論争を巡る資料的価値を持つとともに、有賀先生の理論への理解を深める上で役立つ内容を持っていると思う。

⑤講義では有賀先生は戸田貞三先生は戸主のすべての子どもを含めて直系親としており、戸田先生と直系概念の内容が違っていると指摘しているが、概念を区別していない。森岡清美氏は1957年にこの点を踏まえて、「家長の直系親必ずしも『家』の系譜をふむ者ではないから、誤解を避けるために嫡系・傍系という述語を採用する」とした（『家族の構造と機能』『講座社会学第四巻』東京大学出版会、1957年、30頁）。有賀先生は、1960年発表の論文で、森岡氏に依拠して嫡系概念を採用すると述べる（『家族と家』著作集Ⅸ巻、24頁。『日本の家族』1965年（著作集Ⅺ巻所収）にも同様の註記がある。なお講義では、直系概念が用いられている。そこで、講義録の中で、直系「嫡系」と補って理解の便を図った。筆者も講義中直系概念について混乱した記憶があるので注意されたい）。

有賀先生は講義と併行して論文「義理と人情－公と私－」（1954年12月の稿了と推定、後に「公と私－義理と人情」に改題され著作集Ⅳ巻所収）を執筆している。有賀先生は講義の終り部分で公と私を論じている。論文執筆の直後の講義である。説明は簡単だが義理の中でも公（上位）に対する義理が優先され、公に対しては私は人情となると説明している。

⑥その他の概念使用で注意したいのは、次の二つである。「家族と家」で血縁・非血縁は親族・非親族に改められるが、講義では前者が使われている（著作集Ⅸ巻、24頁註9参照）。『日本家族制度と小作制度』の「訂正追記」（著作集Ⅱ巻、711頁）で、「大家族」の表現を「複合家族」に改めるとしているが、講義では「大家族」も多用されている。

⑦有賀先生は講義の中でもはや同族と組の相互転換論を説くことはない。しかし、モルガン流の発展段階論を否定し、同じ文化圏内の類型を類概念とよんでしばしば見られる歴史概念との混同を批判し、その限りでの諸類型（たとえば家の諸類型）の相互転換を説いている。有賀先生の概念についての厳しさを学ぶことができる。

⑧第一回目の授業の初めの部分が欠如している。高橋の記憶では遅刻したため初めの授業時間のそのまた初めの一部だけ、15～20分間分を記録していない。ノートの初めの2頁分が空白のままである。

⑨有賀先生の講義には、はっきりした章節構成がない。区切りを明確にしないままぶっ通しで講述される。以下の文章中の見出しは、便宜のために高橋が挿入したものである⁽ⁱ⁾。

注

- (i) 本講義録は、2007年11月に柄沢・高橋によって活字化されたものを、高橋のノート現物を参照して編集委員会が修正したものである。□は編集委員会による判読不明箇所、[]は編集委員会による補足である。解題も2007年11月に高橋によって執筆されたものであり、今回の公表にあたって高橋の校閲のもと編集委員会が書き改めている。

家族制度と日本社会

有賀喜左衛門

(4月30日)

§ 文化の意味⁽¹⁾

§ 家

家は居住している建物を指すと同時にその中の集団生活をも意味する。従ってfamily memberを家族員といわねばならないが常用語ではそれを家族で代用している。ここでは集団生活を家であらわしfamily memberを家の成員であらわして行きたい。家とは何か？ 人間の集団、特に生活集団 生活協同体一定の土地の広がりの上に存在している。一定の空間をしめる、血縁集団と地縁集団、地縁関係なくして、集団は存在しないから血縁集団であると同時に地縁関係をも意味する。所で家は血縁関係であるか？ 父母と子は血縁関係であるが、夫婦集団は血縁関係ではなく、一つの性関係に基く集団とみなされる。モルガンの家族の分類で血縁家族をあげている。特殊な場合にはありうるが現代或は未開社会では夫婦関係に近親関係をさけるということが多い事実である。（エジプトの皇族、古代天皇の家族、ハワイの土人）たゞしそれは婚姻が非常に限られているせいであろう。

家にとって何が一番重要な集団のキエンであるか。

家は血縁関係であるということはとうてい出来ない。

ともかく家を血縁集団であるという定義は出来ない。今日普通に見られる家で子供のある夫婦関係子供のない夫婦関係に分類出来る。血縁集団が家の定義として考えるならば後者は家ではない。そこで子供は家の為の第一条件ではない。従って夫婦関係が重要である。家を定義する時には夫婦関係を中心とする集団であるといえるわけである。この様に家を定義するには色々整理して何が基本条件である

かを見るのである。以上は普通の形の家を見たのであるが、他の形の家を見たら色々の問題がある。例えば母系集団などの存在である。かくて、家を固定したものとして見たなら色々のものがある。

歴史は形態として見る必要がある。そしてある形態はその次の段階の過渡的形態であるかどうかを見なくては行けない。

こうして夫婦関係の存在は基礎的なものと見られる。民族学などでももっとも違った家に類する現象を見ると我々の家よりもっと複雑なものがある。これは特に未開人になる程強い傾向を持っている。西洋はより簡単になる。この様な世界的視野で見ても夫婦関係は基礎的要素でそれが色々複合しゆがめられて現れるに過ぎない。一般的に家族が何故血縁集団であるといわれたかといえば多くの場合子供を含むからである。子供は家集団の重要なメンバーには違いない。より社会的に見れば、夫婦関係は永続的なものでなければならない。子供が生まれるとそれに対する両親の愛情とか生長の為に社会的義務が出て来る。こうして家を永続させねばならない必要も出て来るし義務も生じて来る。どんな社会でも育児は非常に重視されている。これは上の如く愛情からも義務からも説明出来る。生活という面から考えても特に農耕の場合は共同という面から永続が必要となって来る。文明社会になると継続的な仕事が多くその際家族を必要とする場合は永続させる必要が起って来る。又老年になった家族を扶養する場合は、養老院などのない場合は、永続させる必要が起ってくる。未開社会では働けない老人は経済的能力が家族に少ないので捨てるという様なこともあるが、生産力が発達して来ると、養老院などない場合は個々の家が養わなければならなって「ママ」来る。

夫婦関係によって生まれた血縁者の含まれる一般的な場合について述べた。此の場合、夫婦関係が中心となるのであるから、非血縁者が含まれていても良いということになる。法律上の規定如何にか、わらず家生活を現実の集団として見る時は□□他その生活を運営していくメンバーが何であるかを考えねばならない。法律は現実の家族制度をそのまゝ、反映するものとは限らない。例えば、結婚したら独立の家として登録し、親から独立した戸籍に入る。都会の一部ではかなり現実の問題として実現しているが農村などでは決して実現してはいない。法律が現実そのものを規定するとは限らないということは、新しい政治のかゝげた理想をかゝげそれを法律に反映し、現実をそこまで高めようとするることによるもの

である。かゝる点から見ると明治法律の場合、新法律の場合など法律と現実の間に大きなギャップが生じている。

家の生活を維持する為には外部から人を取り入れて、それを包摂して、家の成員として行かねばならない。非血縁者であろうと血縁者であろうと問題ではない。夫婦関係が家の根本要素であるからである。社会学的な見方として大切なのは法律と現実のギャップを研究して行く。つまり法律の作られる基本となっている現実の社会構造を探究して行くのである。法律の場合は意識などさして問題ではないが、社会学の場合はそれが非常に問題になる。

夫婦関係血縁関係でないヤトイ人も近代的なそれと前近代的なそれなどそれは契約関係主従関係を媒介として参加したものである。これにおいてある人は、意識を問題とするが家族意識とは何かといえは共属意識ともいうべきであり、如何なる集団に属する人にもある。この共属意識は主観的に見る場合全然同じかどうか。それぞれの立場に於いて、それぞれ違ったものがある。しかし全体としては一つの意識を持っているというので細部迄意識は同じだということではない。すれば主従関係にたつコヨー「雇用」人も、一家の成員としての共属意識は共通していても個人的心情に於いて多少の違いがある。だから外部から入った人も、その家に参加するという自覚を持つときは家族意識と呼んでもよからう。これは多くの例がある。講談本などに良く出る、忠僕意識などそれである。新しいコヨー関係でも家の生業に参加するという場合、その様なものがやはりある。これは、主観的意識の面から考えて見るのであるが、外部から見たら、主人に忠実であるか、否かということで、外部の人の見方が違って来る。これが家族意識を外部から制約して来るものである。例えば銀行などを従業員が「ウチ」ではというのは外部からも内部からもそう考えているものである。従って共属意識は個人個人の主観的なものではなく、社会的なものでもある。もう一つ例を上げると親が子供を勧導「ママ」するとする。若し家族意識が主観的であるとすれば、これで家族意識はなくなってしまふ。しかし現実には、法律の上でも、社会的な上でも色々の制約がある。若し主観的なものにより家族意識が決まるならそれは刻々変化するであろう。

家族意識は個人意識と集団意識の結びつきにより形成され、その二つの意識は時代によって相当の変化がある

(5月17日)

家の生活の中に血縁でないものが入った時には、非血縁であっても家の成員として認められないかどうか。法律上は家族として決めなくても実際には家族の中に入って生活を一緒に運営して行く場合、家の成員ではないと一概にはいえない。この現実をどの様に見て行くか、問題である。法律上は近親者のうちの一部を家族として認められているけれども。つまり法律と現実のギャップを如何に理解するか、問題である。法律は一革命期に、ある理想型を体现する様に作られたものであるから、それ迄の現実の社会との間には当然ギャップがあるわけで、このギャップを十分に分析し認識して行かないと法律を現実には卸して実施して行くことはむづかしい。日本は特に外国文化をとり入れようと努めた為理想型体现の法律と現実との間に矛盾が生じたことが多かった。特に戦後の場合に於いて甚だしい。故に我々は先づ新しい法律と現実の社会生活との違いをうづめうるか得ないかを判定して行かねばならない。これが我々の実践の出発点である。現実の生活が如何なる歴史的條件によって支えられているかを知っていないと我々の実践を如何に運営して行くかということは非常に難しくなってくる。家の問題を考えるのに、外国の研究が役に立たないことはないけれどそれだけでは十分でない。家生活はどのような生活と内容を持つかという所から進んで行かねばならない。

家が親族関係をもとにして出来上っているという常識的な考え方がある。それには西洋の近代的な family の考え方が入って来ている。家の機能は歴史を下るにつれて次第に奪われて家族となって来ている。そして現在の欧米の家族は特に小さくなっている。そこでは夫婦関係、血縁関係が支配的で中に入っているものが非常に同質的だという考え方が入っている。しかし、そこに入っている人々がそんなに同質的かということ簡単に決断できない。夫婦関係と親子関係などそうである。小さな集団内にいてまとまっているので同質的に見えるだけでむしろ異質的である。この中に入っている個人の意識は決して同じではない。夫婦間、親子間の意識はそれぞれちがっているのである。家の中の親族関係と同質的にいって見ても夫婦、親子、兄弟、姉妹関係においてたとえば長男と次三男は非常に社会的位置がことなる。これは日本の直系親〔嫡系親〕と傍系親の考え方から来ているが、この様なものを同質的に簡単に処理出来ない。夫婦といっても両者が平等の地位を持つ社会と、そのいづれかが高い地位を持つ社会とはかな

り違う。それを簡単に親族関係と十把一からげにすることは出来ない。

そこで全体としての共属意識を持つことが一番強い家の構成要素となる。この家の性格に対しては、その属する社会が影響している。家程違った構成分子を持つものはないともいえる。学校などと同じく、構成因子は異質的であっても、一つの共属意識を持って参加すれば一つの家という社会集団が生じて来るわけである。

家の生活を考えて見る。家としてまとまりのある生活集団となっている。その生活条件のうちに所属しているものは集団内にとまらるが、生活条件にあわなくなったものは外に出るわけである。(というのは家は一定の生活条件に規定されているのであるから、それに合わないものは相当に出すわけである) その家の中で生まれたものもしばしば外部に出ることが多い。つまり血縁者が必ずしも家の中にとまらるものではないのである。

こうして家の中に入るものが如何なるものかは生活条件によるものである。だから家を最初から血縁集団、親族集団といってもそれは、現実がそうでなければ問題にならない。研究に際しては定義よりも現実の家の研究から出発せねばならない。

この場合重要なのは、まづ家は社会集団である。社会集団は人間が生活の為に結ぶ人間関係であり、そこでそれを規定するものは生活条件である。家は色々の機能を持つから規模は大きく或は小さくなる。小さくなった時は夫婦と子供である。それでも純粹に血縁集団でない場合が多い。つまり夫婦は血縁でない。如何に非血縁者を入れるかは奴隸制、封建制、等によりどの様に関係づけるか決定される。

生活条件が性格を規定するのは他の社会集団と変わらない。

基礎的集団としての家

家は基礎的集団とされるが、家のみがそれではない。基本的にはその特徴は夫婦中心の生活集団である。従って基本的に生活機能を持つ、文化の低い社会の family を見ると生産消費の沢山の生活機能が、複合した形で営まれている。文化の高い family の内部を見ると機能の複合度は減少する。近代社会の都市生活に於ける family は、生産機能は殆ど持たず消費機能のみとなっている。つまり生産消費の family との結びつきは、一方的となってくる。しかし低文化民族の社会でも family がそれだけで完結して存在し得ない。未開社会の中では家の比重は

大きい。近代社会では小さい、の違いなのである。つまり家の社会的機能が、近代では小さいのである。

文化が発展するのは大体この様な方向を持っている。

未開社会と高文化社会の家を比較して次のことが共通にいえる。如何に未開社会でも家が他と全然関係なしに完結したものとはなり得ない。だんだん家の機能が奪われ現在では消費機能だけを持って存在し得る様になった。

先に述べた如く、家は夫婦中心の小集団である。従って、その生活機能が多くても社会生活の全機能はつくし得ない。全機能をつくす為には家同士の結合又は成員の結合によらねばならない。こうして聚落が生じて来る。この集落やそれを取りまく関係が如何なるものであっても、家の外部にあって家の生活を包み家の生活機能と連関し、又は包括しつつ、家よりも大きな生活機能を持つ集団として存在するのである。

集落の生活機能は文化の発達と共に次第に複雑にし、分化し、更に外部との関係に於いて新しい集団を作る。こうして内部の□集団の相互関係がだんだん変化する。家もこの例外ではない。その関係が変化することは文明民族の家を消費生活を中心にせしめた一つの事実である。又集落を規定する条件により家を規定する条件はことなるから家の性格も都市集落と農村集落ではかなり変って来る。これは家を外部からのみ規定する様であるが、又内部に属する個人関係をも又変化し規定して行く。つまり外部に適応する色々の考え方を作り上げて行き家のあり方がきまって来るのである。こうすると家はたゞ内部でのみ色々な関係について見るだけでは家は判らない。内部と外部の条件の相関関係を考えて行かねば家は判らない。そうすると家は小さく見えるが、広い社会を見てはじめて理解出来るのである。そこで mass society との関係で見て行かねばならない。

(5月24日)

家の機能

どんな社会集団も機能を持っている。ある機能は集団成立の基礎となるものである場合もある。

家集団にも当然機能を持っている。他の集団の場合の如く（銀行—経済的機能）特殊な機能を持っているのであろうか。家の機能は非常に多い。銀行、会社でも単なる経済的機能では存在し得ないと思われる。社会をとりまいているその基礎づけとなるものが必要なのである。

だから近代生活の中で生まれた特殊な機能を中心とする集団ですら多くの機能を持つことになるから、家は非常に複雑な機能を持つものと思われる。日本では信仰、経済、法律、道徳、芸術的要素、自治的要素が家の機能となっている。

個人個人として信仰を持っていたりも家としては保証出来ないが、日本の場合は家が一国となってその守護神となる如き神棚が必ず各家にある。つまり家の信仰という形であらわれ、家の人々が共同でまつ。その際代表的な役割をする人がある。それは主として家長である。

消費、生産の単位として多分に経済的機能を持つ。都会では生産の単位とはならないが農村では、家族労働を中心としてこの両単位を機能として兼ねそなえている。

法律の場合は戸籍が問題となる。戸籍に属するものを家族と考える。古くは宗旨人別張の中などに家として考えられる集団の記載がある。又相続は日本では家トク相続の特殊な形をとる。それは法律としても慣習としてもあらわれる。

道徳。家の人として、家の人々の義務、権利として規定されている慣習、家名とか、家長への服属とか、家風に従うなど特に義務が多い。

芸術的機能、これは主として家の住居に関連して生ずる。

以上のもの、総合された機能として、以上のものと結びつきながら家の生活を継続して行く基礎になる機能が自治的な機能である。そうするとこの機能は家を成立せしめる家族の相互的力相互関係としてあらわれるものである。

以上が家の色々の機能として考えられる。

§ 家の形態

家の種類

家の種類をとらえるのには色々の方法がある。

一つの世帯に含まれている家人の多少によってもとらえる。世帯人数が欧米よりも多いというのも色々の原因がある。それは多くの世代を含んでいるのである。しかしこの方法では必ずしも家の性質を良くあらわさない。これからして家の分類には「つづきながら」から考えるものが次に考えられる。

家長、又は世帯主を中心にして如何なるつづきからの人が含まれている、又相続の形式によるものもあるが、つづきながらによって分類するのが、もっとも大切だと思われる。この様な分類の中で鈴木栄太郎の分類がある（日本農村社会学原理）。

夫婦家族、直系家族、傍系家族、の三つである。しかしこれは余りに簡単すぎるのもう少し詳しくやってみる。

分類は数ある日本人の家という現象を如何にとらえるかということも目的となるが、もっとも基礎的なものは比較なのである。そこで分類の際最初にはあるものと他のものが近似しているかどうかによって色々のグループを作る。次にそのグループ内で種

差を捨象する（共通のものを選ぶ）。これを類概念という。それは現実のものではなく類概念なのである。それが余り小さすぎればその上に又類概念を作る（左図）。

この類概念は歴史的な概念ではない。この様な歴史的な概念でないものを歴史的な概念とするのは学問上あやまりである。

モルガンが古代社会の中で五段階のファミリーの

歴史的段階を考えているが、それは世界のファミリーの分類以外の何ものでもない。部分的にはそれはあてはまるものである。全体としては決してあてはまらない。つまり彼は類概念を歴史概念にすりかえているのである。

そこで分類の基礎には同一文化を持つ一民族を考えておかねばならない。そして、各時代ごとに分類して見て、連関があれば連関させる。日本の場合は、非常に連関が強いので結果的には同じになるが方法としては正しくない。そして、日本の分類を中国にあてはめるのは正しくない。又制度でもヨーロッパの封建制度と日本の封建制度を考えるのは正しくない。

又先に述べた家の説明からも血縁のみを中心とする鈴木概念は正しくない。

家生活の要因としてその内部に生活しているものはそれを含まなければならないと考える。家は夫婦関係が中心となる。そこで日本の場合、次の様に考えられる（表1）。

今日はAのa、bがもっとも多い。これらは皆固

[表1] (1) 一妻の家

(2) 複妻の家

A 単一の家（直系親[嫡系親]のみが一夫多妻である。）

B 単一複直系[嫡系]の家（直系親[嫡系親]のみ複妻を持ち庶出の子がある。）

C 複合の家（直系親[嫡系親]に複妻があり、外に傍系にも妻あり）

定的なものではなく、常に生活条件の変化により転換しつゝある。

大体、Aの形がどの時代にも多くBの形はどの時代にも少い。

複妻の家は明治維新前の上流階級に多く存在した。同じ時代の社会的条件によって共通に規定され、相互転換の可能性を持っている。相互転換は類概念のみでは決定されない。外部的条件の作用と家族の主体的作用によっても変化する。そこでそこに既に歴史的概念が入っている。

つまり分類としては類概念が基礎となるが、相互関係を考える場合には、歴史的に考えねばならない。

一つの家を考えてもそれは刻々と変化している。親が年をとって行くこと自体既に変化の条件が生じて来る。

又、一つの類の中でも幅があり、分類の中に入らない様な場合がある。たとえば夫婦の一方がかけた場合、夫婦がなくなり子供だけの場合などこの分類ではどこにも入らない。しかしそれらを可塑的傾向として、又は過去に於いてはどれかであり、未来に於いてはどれかに入ると考えると過渡的形態と考えられ、大体これで一応の説明は出来る。

(5月31日)

先の分類は日本のそれである。分類の概念は類概念で基礎的には歴史概念は入らない。しかし現実の生活は歴史概念が入らないものはない。だから歴史概念の入らない類というものが存在するかという疑問が生ずる。自然現象と同じ様な分類は人間の社会現象についてはあてはまらない。自然現象(生物、非生物)においては、類と類の相互転換の可能性などを考える必要はない。しかし人間の文化現象社会現象においては、これとはことなる。人間の生活は他の生物とことなり歴史的発展性を持っている。動物は本能によるくり返し[し]かないのと大きな断層があり、動物と人間の間には連続性はない。人間の身体も文化の内的契機として他の生物と区別される。では人間の社会現象の分類を行っても類と類の間には如何なる関係があるかということが問題になって来る。

先の分類も条件によって相互転換の可能性がある。その際主體的な変化が客體的な変化と結びついて生ずる。だから類としては歴史概念を持たないものであるが、その相互関連は歴史概念を投入しない限り理解出来ないのが社会現象である。この相互転換も無限に出来るものではない。先づ共通の社会的

地盤ということが大切である。たとえば常に相互転換し得るIのAのabcdは共通の社会的地盤に立ったものなのである。

この社会的基礎と離れて単に夫婦と子供がいるからと西洋日本の家族をひとまとめにしてもそれは形式的で決してその家族の性格というものとは出て来ない。たとえば先に述べた直系[嫡系]と傍系の分類は日本の特徴を考慮して分けたものである。同じ様な文化を持った文化圏をとらえて(民族文化圏の如く)研究して行かねばならない。

デュルケームが中間型のホルドを考えてそれをだんだん広く複雑なものにし人類の社会構造を研究しなければならないといっているが、それより民族の特徴、性格を基礎にして研究しなければならないと思う。だから世界中の家族の分類を行う前に各民族の持っている文化の分析をすることが大切であると思う(勿論後には世界中のもの、比較に行くべきだろう)。そしてこの民族の中の家概念なら家概念は同一の地盤に立っているわけで、相互転換が可能となるわけである。このことによって、多くの類が、同時存在していることの説明ともなる。もし発展段階として考えればこのことは説明出来ない。

そこでかゝる社会現象の分類はある民族のある時代的個性を持ったものをその時代において分類して見る。そして又他の時代においてもそれを行い、次に各時代の連関を考えねばならない。先の分類はこの様にした結果得たものである。

以上の様な意味で類は相互転換しあう関係であり、それだけではなく相互に規定し合うものである。

労働地代⁽²⁾ 現物地代貨幣地代は類概念である。そこで労働地代を以て封建的であるということは出来ない。この三形態は古くから存在して来た。この様な時代的個性は時代の現象の相互関係の結果出て来たものである。この三つのもの、結びつき方

(ある時はAが大きく出る、ある時はBが) 時代的個性を作り出すのである。

類概念も一つの社会関係であり、同時代に種々の類概念が出来ても相互に規定しあって一つの時代的個性を出す。

そしてその個性の基礎 (A、B、C それぞれの基礎) にはその時代のあらゆる現象が存在する。

A、B、C は断層を以て対立するものではなく連続したものなのである。

非血縁家族

次にどうしてこの分類に非血縁のものも含めたかについて考えて見る。家を法律的な概念として捕えた場合は別である。

現在ではあまりなく法律規定に影響されて、非血縁者を家族意識を以てとり扱わず雇傭関係として取り扱っているのであるが、戦前迄は事態はやゝ、こゝなつた。

〔ヤトイ〕という概念はどこから来たか。それは、子供が未成年である家にやとわれて行く。しかしやとう条件はその子供にしつけをするということが条件である。それは一人前になって、働けるようになって世話をしてもらおうということである。それは当時 employment が非常に少なかったことに起因するものである。十才にならないうちに生家を出る。養育と訓育をされるのである。そしてヤトイ家の仕事

を覚え成長すると嫁をとってもらふ。そしてその家にやはり住んで何年か奉公したのち、分家させてもらう。分家の後もしばしば働きに行く。

だから賃銀はない。もっとも盆などにくれる躰けなどはあった。これは明治になつても多く、昭和になつても多かった。

別家の際には独立の別家と主人の家に通勤するものがある。この際のヤトイ人の考え方は、今日のものとはかなりことなつたものである。家族として取り入れて別家させるのは自分の家に生まれたものと変らない様にして行われる。主人もやはり、家の成員として考える。もっともそれは、愛情の問題とは別である。だから、宗旨人別帳でもやはり家族として考えるのである。

家を生活集団の現実として取り扱うなら法律の規定を一応はなれて考えねばならない。以上の様な理由で分類の中に非血縁を入れる。

複合の家

特殊な形態がある。飛驒の白川村である。その成立の原因は、未だ的確な説明は出来ていない。大正九年の資料が比較的新しいのでこれについて考えて見る。

木谷、御母衣、平〔瀬〕という部落がある。建物は合掌作りといわれタウトもこれを絶賛している(図1)。

これは特殊な条件のもとで生じたものである。特殊な条件のもとでは典型的な形で、現象があらわれて来る。従ってこれを特殊だから例外だといって排することは出来ない。一般条件のものに対する説明にとって非常に都合がよい。つまり同じ社会的地盤の中でどの程度の可能性をもって存在するかを判るわけである。

(I) ⁽³⁾ の (B) 複妻に就いて

例 岩手縣二戸郡荒澤村石神のある家(齊藤家)(昭和10年)

当主、妻、母、長男その嫁、二、三、四、五男、三女、孫娘、姉

召使の夫と妻、長男、長女、次女

召使 養子、養子の妻、 計20人

日本家族制度と小作制度にくわしく述べてある。

此の場合庸人が複合の家に入っている。ここでは召使と主人の関係が複雑であるが一つの家となっている。此の場合一応庸人の性質を考慮しておかねばならない。此の様な複合の家は、すべての時代に少なく特に現在には殆どない。しかし、現在の家が、以前の家族との関係なくして成立するものなのであるか。やはり、同じ意識のつながりがあるものなのではなかろうか。文化の発展はどういう経路をたどりどういう発展をしているのであろうか。家族の研究もその底に於いては文化とつながっているものである。

一つの家を取り上げた場合、その様な家の生まれる地盤がある。従ってその地盤について考えて行かねばならない。

齊藤家は昭和十年に有賀氏が調査した時の状態で前年には、召使が二組計四人 家の次女が嫁に行かないので上の状態にもう五人が加わるわけである。明治初年頃迄は召使夫婦が四組位同居していたのは余り珍しくなかったという。次男、三男も、結婚して、何年か同居して働いた後分家する。

間口19間 奥行が七間半の大きな家である。その中に一坪位の部屋が三つか四つ又二坪位のものもある。ここに召使夫婦などが住むのである。

直営耕地一町三反、その他二町位 別にしつ器業を営んでいた。旧藩時代の頃はかなり手広く行っていた。その為かなりの召使などが同居していた。次、三男も同居した。そして家長の弟が鋤頭となっている。明治初年耕地は五、六町だったからだんだん縮小して来ているわけである。それは、次、三男はいう迄もなく、召使に迄分家財産を与えて分家させて

いる。

この召使の分家⁽⁴⁾を名子とその地方では呼ぶ。有賀のテクニカル・タームでは、雇人分家、非血縁分家、家来分家と呼ぶ。名子が、十三軒、昭和10年この名子にじゅんずるものがなお四軒ある。

家内雇人の性質は如何なるものなのであろうか。現在ではこの様な雇人を家族とは考えないであろう。しかしその場合にも、家の成員であるとはいえると思う。この様なものの性質を考えるには、四、五十年位前から考えて見る必要がある。遠縁、非血縁の召使であるが便宜的に、非血縁者として考える。雇人として非血縁者を取り入れたのが明治初年に家の成員として登録したこともあった。明治以前には主人の家の成員として登録した場合が非常に多い。これは宗門人別改帳を見れば良く判る。これは毎年記されたものである。戸籍ではないが、当時の状況は良く判る。この外に上代戸籍(正倉院の御物として残っている一残簡一ものは神亀、養老、大宝)でも様子が判る。

これは明らかに班田収受の為にしらべられたものである。

これ等によると維新以前の戸籍は、雇人と雇人に類するものを主家の戸籍に登録した。中世は戸籍がないから判らないが風習から推察し得る。明治以後急にこの状態が法律により変えられたのは西洋の法律を取り入れたものである。昔は、雇人でも永続して主人の家と深い関係を持つと家族と同じ考え方をしていた。宗門人別改帳は勤続しなくても家族として取扱われたのであるがそういうことだけではなく感覚意識の上でも、雇人は家族として考えられた。そのメルク・マールとなるのは永年勤続後、財産を与えて分家させることにある。場所によっては雇人を別に書いてある所もあるが、それはとけ出の形式としてだけであり雇人分家が行われたことを見ればやはり家族として取り扱っていたものと考えられる。

雇人にもしつけ奉公、年期奉公、日ヤトイ、季節奉公、の四つが多い。

明治以降時代の下るにつれて、後二つのものがだんだん多くなる。一般に永年勤続が同一家族になる一番大きな理由である。

これは一種の養子なのである。養子には家とり相続するものとしないものがある。相続しないものは労働力として家に入り、その家の扱いは嫁をもらって分家させる場合とその家に置く場合とがある。普通は養子として法律的手続することはしない。大

部分は戸籍上の養子とはしないけれど、このようにしてやといわれた雇人は家族として取り扱われた。しかし肉親の子とはやはり違っていった。永年勤続する雇人にはどうしてなるか。比較的大きな地主がある時、貧しい小作人が自分の子を教育して一人前にするには、今と違って、学校に入れることも出来なく地主の家に入れてしつけてもらう、のである。

生産力が発達せず、土地の開発も進まず土農工商の如く封建的身分関係、その他の封建的束縛（住所の移転が自由に出来ない。）のもとでは人民の生活は自立することがむつかしく、有力な家に依存せざるを得なかった。これが明治維新後、封建的身分制度の撤廃、商業の発展によって、農民の移住もし易くなり生産力も向上したが、エンプロイメントは少なく、相対的過剰人口の堆積する農村で農民は非常に困窮したのでやはり有力者に依存せざるを得なかった。その際に10才又は10才以下で主人の家に躰け奉公に行き養育訓育される。主人の家では子供を養育し、嫁をとり分家させるのは義務となる。もっとも子供が、素行が悪い時等は躰け奉公の約束を解除する。

このヤトイは今日の契約関係によるものとはことなる。給料も出さない。しかし、〈シキセ〉をくれたり、衣服をくれたりする。

此の場合、子としては考えているが主人の子供とは同じではない。やはり主従的身分関係は存在する。子の意味にも一般的な、父子、母子の子と、主従的な関係をさす子と二つがある。

たとえば親分子分の関係などがそれである。

主人は子供を養育するが農家なら農業をやらせ、一人前になれば、（齊藤家などでは若い者になったという）若者としての待遇を与えられ、やがて嫁をとってもらって主人の家に同居する。嫁をもらうと特別の部屋をもらう。子供が出来ても、分家を直ぐするのではない。一般に三〇〜四〇才の間に主家を出て分家するのである。

分家する時には、家を建て、与える。宅地は無償で貸す。その外に土地を与えたり貸したりする。齊藤家ではこの土地をヤクズ（役地）と呼ぶ。外の地域では名子地と呼んで小作料をとらないものである。名子の自用地と考えられる。小作料を取らないのが一番の特徴である。役地には宅地（含菜園）と田畑があるが、此の役地の外に小作料を取る土地を貸し与える。その大きさは、時代時代の主人の家の所有土地の大きさに関係し、一定していない。役地は余り大きくない。名子に貸し与えた小作料をとる

田畑では刈分小作を行った。

それは田畑の収穫物をその現場で分けた。その外に家具農具食料を分け与える。時期は一般に、秋の収穫がすんだ後である。

さらに分家した後の関係があるが、その前に都市でもこれと似たことが行われた。大阪の商家の例である。10才位に、丁稚を入れた。その場合にやはりしつけ約の様なものをする。それは誓約であり、上から下へあるいは同等の立場で行うのではなく、下から上へ行うものである。農村と違い口頭でなく誓約書のある時が多い。最初は掃除をやったり、煙草盆を客に出したりしている。その間に店のことを覚えて、三、四年後手代になる。手代を10年15年位立てば主人はその持家に手代を分家させて嫁をとってやる。この場合は主人の家に同居して複合の家を作ることはない。これを京大阪では一般に別家という。血縁の場合は分家である。しかし先の齊藤家の地方では血縁を別家非血縁を名子という如く、別家そのものに非血縁の意があるのではない。別家にも主家に通勤するものと独立するものとある。独立するものは主家の信用をもらうわけである。別家が多い時は通勤が多い。独立した別家も自分の子を又主人の家に丁稚に入れるのである。

（6月14日）

白川村の如き特殊な例が如何なる意味を持つのであろうか。

分類に現れた単一の家特に直系〔嫡系〕の家は非常に一般的なものである。

数の少ないものを例外として省略するのは外の家の意味を正確につかめない。というのは分類されたそれぞれの類の関係は相互に転換し得る可能性を持っている。つまり条件が変れば相互転換し得る。そこで直ちに発展段階としてふり返ることは出来ない。この例は日本の家の示す可能性の限界を示すものである。普通の家が性質が特殊の家に強くあらわれるのである。分類の根本問題として似ているという時、外見的形式は類似ではなく内面的に似ていることを考えねばならない。外面的にも内面的にも似ていなければ人文科学に於いては同じものであるとはいえない。たとえば夫婦と子供がある時西洋と日本ではその内面の結合の性質は同じではない。かゝる意味から例外と思えるものを考えて見るのが大切である。

○岩手県、二戸郡、荒澤村石神の斉藤家（昭和10年7月）の家族構成（図2）

白川村の家族構成を比較して見ると斉藤家は召使が二組ある。それは同居しているから家生活は主人が主さいしている。

白川村は兄弟 兄弟の子供 従姉弟違いも一つの家長の主さいする家に含まれているから一軒の世帯といえるであろう。

白川村の場合は傍系は当主が家の農事や家事をカントクする下に使われている。長男が一人前になると長男が農事を行う。従ってその命令に使役される。つまり家長の命令を受けて長男が支配する。結婚はヨバイの様な形態を取り子供は娘の家で育てられる。かゝる男女関係は村で承認されているから、結婚に準ずるものといえる。

かゝる傍系親の親子は普通の家の親子とはことなる。傍系親は休日、休時間に、自分の土地を耕作する。そして休日には傍系親が親子で家長の直系親〔嫡系親〕とは別に食事をすることがある。これを親子祭りという。

子供は傍系親ではなく家長が扶養する。しかし細かいことは母親がする。勿論母親の労力の大部分は家の仕事に費される。石神の斉藤家の場合、主人の直系〔嫡系〕家族の外に五人と三人のグループがある。召使いは小さい時から使われ長い奉仕の後主人の世話で妻帯し別の部屋を与えられて直系〔嫡系〕の家族と別々に寝ることになる。勿論独立しているから寝部屋に過ぎない。自己の全労力を主人の家に奉仕し主人に全生計を支えられる。

コマチ〔ママ〕があり、休時間等にやるコマチに

と、カマドを分けると家屋敷、小作地、小作地でない土地をもらう。しかしやはり、主人の家で忙しい時には働きに行く。それでも世帯は別にするから、生活共同体としての家が分れることが白川村との違いである。さらに白川村は血縁者のみであるが斉藤家は非血縁者のものも含む。この違いは生活条件の違いであるが、それはなかなか判りにくい。

次に、含まれている人々が家の成員としてみとめられているか。

白川村は一概に複合の家ともいえない。中間的なものである。つまり直系親〔嫡系親〕は夫婦関係を持つが傍系親は通常のそれを持たない。戸籍の上では夫婦でない。そこで形式的には単一の家であるが、内容的には複合の家である。

直系のみ包含する家と対照すると直系のみの単一の家が大きくなる時、その転換する形として上の二つの例をとった。つまり大きくなる時、傍系親を加えたものか雇人を加えたものかどちらかに発展する。この線でもって、単純から複雑へと家を並べると家の形を系統だって考え得る。大正九年の国勢調査はかゝる日本の家の新しくなるある重要な時期を示している。この頃エンプロイメントが急激に発達した頃なのでこの頃非常なる転換期となって農村に影響した。

戸田の家族構成（大正九年の国勢調査）の分析

《家族構成》で傍系親の含む割合を数値的にあらわされている。この書の中で傍系親の割合を書いたものによると普通の家でもかなり傍系親を含んでいることが判る。叔父伯母も6万6000人 世帯主は1111万9000人 前者の3000 従兄弟姉妹 甥姪

が301000 従祖父母 1000 人兄弟姉妹の配偶者7万5000人 等である。

この国勢調査は家族として血縁関係のもののみと捕えているので先の斉藤家の如き場合は考えられていない。

比較的遠縁のものを含むものと含まれないもの、あるのはどうしてか、問題である。かゝる傍系親を含むか含まないか。含まないものは直系親〔嫡系親〕のみを含む訳である。同じ類に入る家には違いがあるが共通性の検討が大切である。直系親〔嫡系親〕のみ含むAとBを比較すると個々の家はすべて同一でない限り個々の家には何等かの差異がある。それは生活条件の差異に基くものであり、成員の年令、性別、能力等もことなるから同じ様に見えてもやはり差がある。そこで如何なる同類の家にも違いはある。この違いは一時代同地方の家にも見られる。

この違いを見ることも大切であるが、共通性の検討が大切である。

差異と類同の検討が科学の出発点である。ここで比較法も問題となって来る。

大正九年を見ると⁽⁵⁾ では傍系親を多く含むものも少しづつ見られるがその極点に立つものは白川村である。

(例)を見ると私生児が非常に多い。しかし相手は公認されている。全然習俗の違った国でつくられた法律が日本に適用されたので、ここに喰い違いが生じたのである。明治初年普通の家族構成を持った家が新民法で規定される時無理のなかったのは一般的であったが、白川村の如く外れるもの法律に合わないものもあった。これを法律により全然改正してしまうことは、出来ない。そこでこれを解決する為にも家がどうして成立して来たか、成立の条件はどの様なものであったかを考えて置かねばならない。一般に差異のみ強調されて共通性が見過されることが多い。さもなければ普通の家の解決に役立つ資料とならない。

先づ第一にこの地方は山間の不毛の地である。耕地も少ない。

江戸時代には重い封建的租税、しかも現物貢納であった。そこで人口の増加に従って家を増やして行くことは耕地が分割される為、耕地が不足して来るので、分家はさけられたものであった。これが成立の条件とはいえないが、成立した大家族が發展していった理由である。大家族は近世の中期元禄の頃にもっとも大きくなっている。結果的に見ればここでは普通の形の分家を出すことは出来なかったといえ

る。しかし近世の初めに有った大家族がそれ以前にあったかどうかははっきりしない。

白川村の長瀬では天明八年12戸163人が嘉永六年13戸227人になって一戸当り13.5から17.5人に増加している。収穫は弘永年間2石しかなかったという。勿論この表高の外に高のうちに入らなかった焼畑が存在していたとは考えられる。ともかく本田畑の少なくは苛酷な租税を収めねばならないことが、分家を妨げた理由である。しかし人口の増加につれて分家は必要となって来る。併し、それは普通の形では許されない。耕地をつぶされない様にせねばならない。そこで一軒の大きな家の内部で特殊な形が生じたのである。上の如く天明から嘉永と膨張している。かくて古代ではなくても条件さえあれば、大家族は生ずる。これは生産力が低いこと地理的制限あるいは社会的条件たとえば封建的重貢租、移転の自由が制限されていたこともその原因である。大家族發達の内的条件は中心なる夫婦があり、家族が大きくなる為にはその子供を内部にとどめねばならない。その際育てねばならないという様な社会的条件がある。又愛情に基くものがある。しかし養育が可能である。家族内にとゞまり得る生活条件がなければならぬ。中切部落の大家族の場合を見ると耕地が少ないことは勿論理由となるが、江戸時代の社会政治上の条件がおゝいかぶさり、その中で生産を上げるには労働力を要し労働力を外に出すまいとする意識が非常に大きくなる。

(6月21日)

白川村の大家族が大きき⁽⁶⁾ になったのは近世の中期である。そしてその崩壊後は明治以降の資本主義ボツ興期の色々な事情が左右している。その間村落を拘束する政治的要素が大きく作用している。この大家族がほんとうに崩壊したのは昭15年庄川にダムが出来て発電所が出来たことである。この結果分家をしてもいいという様な条件が出た。家屋はそのまゝ残っているが、家族構成は単純化した。そしてその家屋すらも最近は大ダムの設置の為危機にひんしている。

江戸時代の封建的制限が明治になって取り去られても、家が変革しなかったのは一つは、山村の特殊性によるもの。一つは墮性的なものでもある。もっとも政治的条件が変革しても経済的条件は急に変るものではないから家もそう簡単に壊れはしない。白川村の中切の大家族が日本全体から見ても非常に特殊なものである。これからその経済的条件につい

て考えて見る。

労働組織は家長がカントクし、直系親〔嫡系親〕も傍系親もその下に働く。傍系親は家長の保護と支配の下に全労力を提出する。

傍系親はシンガイ（新開）を持っている。自分で開拓したものもある。それは自分の財産という様な意味である。

家族間でその所有を認知し合っている。田畑は條件の悪い旧畑が新開として与えられるか、あるいは家長の家の田畑の切漆の自分で開こんだ条件の悪い土地をもらう。労力は大部分家の耕地に投下され、休時間、休日にかし手入出来ない。シンガイは傍系親だけでなく直系親〔嫡系親〕でも家長以外のものは自分のシンガイを持つことを許される。しかしシンガイの意味は主として傍系親の自分の資財を意味する。シンガイに働く休日は春から秋にかけ五日目に一度位 養蚕期等にはない。正月に一週間、十五日、二十日正月、初午と三日がある。冬に休日がないのは冬に食料が不足することに関係しているらしい。休日には傍系親は家族全体⁽⁷⁾の食事をしない。休日でない日は一緒に食事をする。

直系親〔嫡系親〕の親子とは別に夜バイの相手等が自分達のシンガイでとれたもので一緒に食事する。しかしシンガイからとれるものは少ないから、それは困難である。そこで冬は休日が少ない。冬場には休日が少なく、正月の一週間はしかも別鍋ではない。それは盆の場合と同じく年中行日の祭日となっているのである。そこで冬には三日しか別鍋の休日はない。これはつまり冬場に休日がないのは農繁期にそなえて、その期に休日を多くする様に家長の配慮が加えられている。シンガイは如何に私有財産でも、やはり家長の統制が及んでいたことを知るべきである。そしてシンガイを持つ人々が死んだ時に家長が没収することはない。シンガイのないものに与えるのである。又老人のシンガイも若いものにゆづる。結局これはシンガイは家の財産として考えられている様な性質を示すものである。女のシンガイは子供に直接うつるとしても、男のそれは家の財産と見られる傾向は特に強い。しかし女のシンガイの場合でも子供の生活を全体として保護するのは家長だから、女自身のシンガイとは完全にはいいきれない。かく考えるとシンガイは一種の扶持のようなものである。家長は家族全員をカントクして指揮し働かせるがその際のシンガイは家の財産であり、それをシンガイとして使用することを許したと考えて良い。シンガイは田では米1俵半～1斗位のもの

である。開墾してシンガイを得たのは非常に古い頃の事実であり調査を始めた昭和六年以後頃にはすべて、ゆずり受けたシンガイであった（死人、あるいは老年の叔父伯母のものを）。

シンガイの田の田植、稲刈は家のタンボと一緒にし、皆の労力で助けてもらった。シンガイの田畑は焼畑と普通畑がある。ひえ、粟は自分のものにするか（7～8斗位）小豆等は金銭化するために得る。焼畑の面積はかなり大きい。シンガイは男の方は大体一人一人耕作している。養蚕の時期には家の仕事で忙しい（もっとも重要な貨幣経済の源泉）のでシンガイで働く様なことは許されない。

又シンガイは自分の女と共同して作ることもあったが一般には共同作業は家の中の親子マチ、兄弟マチで作ることが多かった。さらに桑の木を植えて置いて養蚕期に家長に買ってもらうという様なこともした。苗は家長の畑で育てのちに自分のシンガイに植える。女で五十貫位男で百五〇貫位。休日には仕事に出てもシンガイで働いても家で遊んでも自分の飯を食べた。これが直系親〔嫡系親〕と傍系親のもっとも大きな違いである。この様に傍系親の男女が直系親〔嫡系親〕と別に食事する風習がこの大家族の持つ性質を色々考えさせる。

シンガイの際に使う農具牛は自分のものではなく家のものを使う。

自分のシンガイで得た収入の使い方については男は自分のみのまわりをと、のえたり、外の家にいる自分の子供に着物を整えたりしてやり、その他大部分は酒代になった。女は子供を持つのであるから、その為に費用を使った。もっともその費用の大部分は家長が負担した。この様な傍系の男女の生活は不思議なものである。家長の家の中で一種の夫婦生活をしているともいえるがそれは独立の家を作っているのではない。そして分家の方向への発展は著しく妨げられている。しかし、直系親〔嫡系親〕と区別されて、自分達独立の生活を持とうとする微弱な意識の芽生えが別鍋などに見られる。

以上の如く傍系親の生活は直系親〔嫡系親〕に従属的な位置を持つ。もう少し考えて見よう。長男（ア二）と外の子供との差異のもっとも大きな差異は普通の結婚をするものは彼のみであるということである。

家長は財産をつかさどり祭祀をつかさどり養蚕を支配し楯頭として農業をさい領し、家族とは別にオエで食事をする。夜はチョーダという寝間に家族とは別に寝る。母屋の中にはイロリのある間は一つで

はない。そのイロリにスワル時に位座が決まって居り、家長の座はヨコザといわれて他のものはそこにすわることは出来ない。

アニはこの家長の座を襲うものと考えられ、その結婚は他のものとちがい非常に重視される。妻はヨバイなじみのものもあれば仲人によるものもある。若い時にはやはり鋤頭の支配を受ける（此の前鋤頭は長男といったが間違いで主に家長の弟である）。

しかし結婚すると別の一間で妻と同棲し他の傍系親と異なる。この傍系親が家の中に長く含まれること〔もある〕が、その傍系親はその大家族の中で一時的なかりそめのものではない。それは大家族の中の仕事を進めるのに重要な仕事を分担している。しかし外の地方よりもずっと低い地位を占めている様に見える。主観的にはどうか判らないが外部から客観的に見るとともかくその様なことがいえる。それは長い歴史を持った組織の中にしっかりとめこまれた一つの位置として考えねばならない。

○次に石神の齊藤家に於ける大家族に帰る。

昭和10年雇人夫婦が二組いた。これは同居しているから一つの家に家族として取り入れられたものとして考えて良いと思われる。ここでは分家が予定されている奉公人家族であることが白川村の傍系親とことなる。そこで召使も普通の結婚をしている。それらは独立してナゴになるというものであるから、それと名子とどういう関係にあるのであろうか。問題になろう。召使と主人の関係を先づ考える。ヘヤといえぱ一坪位の寝間があり居間の機能は果さな

い。召使家族の居間は台所である。

子供などは主人の居間等にはあまり行かない。ここでは休日は決っていないが閉は利用して自分のタンボを耕せる。ここでは別鍋の様なものはない。シツ器業があるのでそちらにも労力はとられる。

ともかくこれらの召使は分家が予定されている。

召使が分家する形式は次三男のそれと異なる。それはそれ以前に結婚して同居し、家の農業、シツキ業や家事の手伝をし、分家する時にも分家財産を与えられることは二三男に似るが、分家財産の内容、社会的位置は違う。次三男は田畑、山材家屋、等をもたらす。その大きさはそのときどきによりことなる。雇人は茶園つきの屋敷をもらい家もたててもらふ。そしてタンボは二人役、畑では一反歩～二反歩をもらふ。それを役地（ヤクヅ）という。

それは分家財産として貸してやる土地である。（茶園つきの屋敷と土地）、その外に田を三人役、畑若干と分作地として貸してやる。分作は普通いう刈分ということである。

役地の収穫物は名子が自分のものとして取得することでありそれから大家が小作料を取らないものである。

刈分とは一定の分配の率で田に山をこしらえてそれを分ける。これは分家の形を持っていることは確かである。この様にして分けた土地は少ないからだけで一軒の家の独立の生活に十分とはならない。勿論地主といっても、多くの土地を分けてやるほど十分な田畑を持っているわけではない。こうしてこれらの分家はその後どうして生活するか問題となる。他の仕事があれば問題ないが、名子制度の残っている土地は、山村で貨幣経済の未発達土地である。そこで名子は地主の家に仕えるということになる。そしてそれ以降地主と特殊関係を結んで生活を営んで行く。江戸時代の封鎖的時代には一層甚しかったであろう。明治以降ようやく出入が激しくなり山林が開発されて以来次第になくなって行くのが普通であるが、ここでは特にその様な時代の波の押し寄せるのもその地方の特殊性から遅れた。

これがどうして大家族が成立したかを教えるものである。つまり大家族と特殊条件との関係を吟味してみなければならない。その条件が変わった時他の家族形態に転換し得るから、外の家族形態と共通な性格をになった一つの特殊形態と考えられる。こうして違ったものの間にどのような類似性があるかをつかまねばならない。

（注意）屋敷名子と分家名子の違い

前者が大家⁽⁸⁾からの分家の形によらず、実親が家を建築し、家財道具等を与えること、又大家から受ける役地が一般に少ないというだけである。

注

- (1) この部分は15～20分と記憶しているが、高橋が遅刻したため記録していない。「文化の意味」と見出しのみ記録している（ただし「文化の意味」の文字には×がつけられている）。

参考までに、有賀先生が語ろうとしたこの項の内容に近いと思われる文章の一部を主著『日本家族制度と小作制度』から引用しておく（著作集Ⅰ巻247～249頁）。なお、有賀先生の文化を論じた文章の主要なものは「文化論抄」としてまとめられている（『文明・文化・文学』御茶の水書房、1980年。この本は著作集Ⅹ巻にも収録されている）。

「家は、人間的・文化的事象として、文化科学の経験的な特殊諸科学の立場で捉えることができる。それゆえ、法律学的な家、経済学的な家、宗教学的な家というような捉え方は、家のそれぞれの一面を明らかにするものである。社会学的立場はそれらの一つであり、それは人間の存在形態としての社会関係を捉えるものであるとすれば、家が社会関係として捉えられる意味をつかむのでなければならない。社会学的概念としての社会関係を私は個人と集団との相互媒介の形態と定義する。」「家という社会関係の内部的契機となるものは種々ある。性結合や血がその内部的契機となるものとして一般に解釈されており、それがいわゆる種族的な血縁の家として捉えられるものである。しかしすべての性結合や血が、家という社会関係の内部的契機となるのではないし、また性結合が夫婦関係として、血が血縁の家の成員としてその内部的契機となることは、生物学が対象とする単に自然的もしくは生物学的な現象ではない。それは身体と心意との相互媒介、および個人と社会との相互媒介を含む二

重構造における、人間的・文化的意味に転化しているものであることを知らなければならない。従って性結合や血がこの意味において家という社会関係の内部的契機となると、宗教、経済、法律、道徳等が家という社会関係の内部的契機としてそれに結合し得る根拠があるのであって、それらが等しく家の内部的契機となることはこのような意味によるのである。」「人間的・文化的な事象の本質は自然的な性結合や血の関係を超越するものである。そこに非血縁が、家という社会関係の内部的契機となり得る根拠もあることを理解することができる。非血縁者が家の内に取り入れられるとき、それは常に何らかの文化的意味を持つのである。たとえば養子もそうである。」

- (2) この箇所「主な関係がその時代の上部構造を規定することにも注目する」との高橋による書き込みあり。
- (3) この箇所「家族制度と小作制度 p84」との高橋による書き込みあり。この頁数は『日本家族制度と小作制度』（河出書房、1943年）と講義を対照して検討した、講義に関連する同書の頁のことである。以下の注で表示された頁はすべて同様の表示である。
- (4) この箇所に「p277 しかし、名子ということばは非血縁の従属小作人を指すのみではない」との高橋による書き込みあり。
- (5) この箇所は数文字が欠如している。
- (6) この箇所に「p305のあたりから」との高橋による書き込みあり。
- (7) この箇所に「家長の家族」との高橋による書き込みあり。
- (8) この箇所に「オーヤ」との高橋による書き込みあり（高橋が読み方をメモしたもの）。